日本二十六聖人記念館蔵「漆塗大傘」の主題と成立環境
―16～17 世紀の東アジア漆工品とポルトガル―

鎌田満希（東京大学）

日本二十六聖人記念館(長崎市)が所蔵する「漆塗大傘」(直径 127.0cm)は、表面の中央から外側にかけて同心円状に雲鶴図、葡萄栗鼠図、戦闘・狩猟・行進図を、裏面に雲鶴図を、黒地に金で表現する。完成直後にヨーロッパへ渡ったと考えられ、20 世紀初頭にはローマのイエズス会施設が保管していた。本作に初めて注目したのは、G.シュールハンマー氏(1882～1971)である。彼は 1927 年から 34 年に発表した独語論文で、表面の主題を朝鮮出兵(文禄の役、1592 年)で活躍するキリシタン大名とし、兵士の盾に見える「十字架を持つ蟹」の図像は、フランシスコ・ザビエル(1506～52)がアジア布教中に起こした奇蹟を示すものと指摘した。この奇蹟譚は 1608 年以降にヨーロッパのカトリック圏へと広がり、ザビエル列聖(1622 年)の根拠ともなったため、その頃にイエズス会日本管区が主導してマカオで制作させたと推定した。1969 年に現所蔵館へ移された後も本格的な研究は行われておらず、氏の説が踏襲されている。

そこで、表現と図像の考察から本作の位置づけの再検討を試みる。全体にみられる金属箔による平面的な描写と金属粉による暈しの併用は、中国製の「山水人物描金合子」(明・崇禎年間〈1628～44 年〉、南京博物院蔵)や、琉球製の「鳥獣草花箔絵面盆」(琉球・16～17 世紀、九州国立博物館蔵)と共通する。戦闘・狩猟・行進図に注目すると、樹木の様式は、ハプスブルク家の財産目録に載る「朱漆花鳥金彩櫃」(1611 年以前、ウィーン王宮家具博物館蔵)との類似が指摘できる。人物の配置や建築は、『三國志通俗演義』(万暦 19 年〈1591〉、金陵周曰校刊本)など明末の版本挿絵に近く、背景は中国風である一方、将兵が被る羽飾り付きの兜は「泰西王侯図屏風」(1610～14 年頃、長崎歴史文化博物館蔵)に通じ、武装する西洋人の姿としてアジアに流入した図様を活用していることがわかる。全体に円環状の枠組みの中に戦闘の展開を描く構図は、16～17 世紀のヨーロッパにおける装飾盾や水盤に見える戦勝図を彷彿とさせる。

以上の特徴を総合すると、本作はポルトガルのアジアに対する軍事的進出、それを守護するザビエルの奇蹟を象徴的に描いたものであり、朝鮮出兵とは考え難い。そして、ポルトガル人の注文により、1620 年ごろ、彼らが拠点としたマカオにおいて中国系工房が現地の図像や技法に基づいて制作したものと推定される。

16～17 世紀にかけて、ポルトガル人は東アジアに来航し、漆塗りの調度品や宗教具を制作させた。日本の南蛮漆器もここに含まれる。それらの中にあって、本作は戦勝図という政治的内容を扱う点に際立った特徴があり、こうした世俗的な主題にも漆工芸の範疇が広がっていたことを示すとともに、日本以外の制作拠点の実態や現地図像の転用といった新たな課題を提起するといえよう。